千葉県生活協同組合連合会
千葉県生協連活動報告
2024/12/2　№284
発行：千葉県生協連
TEL　043-224-7753

地域生協部会で水俣市視察研修をおこないました！

地域生協部会では水俣市で発生した公害の状況と現在までの環境再生の取り組みを学ぶために 11 月 15 日から 16 日の 2 日間で、水俣病の現状と水俣病発生により漁師から甘夏生産者へと生業を変えた方たちの圃場を見学しました。水俣病は工場などから環境中に排出されたメチル水銀化合物が魚などに蓄積され、汚染された魚などを食べることで起きる中毒性の神経系病気で 1956 年に初めて発生が確認されました。環境汚染により引き起こされた健康被害と自然環境の破壊は、被害の大きさと影響の深刻さにおいて歴史上これまで類例のない公害といわれています。水俣病の歴史および現在までの環境再生の取り組みを学び、これからの地域生協の環境課題について考える機会として実施しました。

■視察先

11/15(金)　水俣病センター相思社のアテンドによる水俣市の視察

11/16(土)　生産者グループきばる、甘夏生産者訪問

■内　容

１日目は、到着後に水俣病被害者の支援と水俣病に関する調査研究をおこなっている一般財団法人水俣病センター相思社にガイドをお願いし水俣病に関連する場所を案内してもらいました。初めに見学した場所は不知火海を一望できる大崎鼻岬で企業（チッソ）が水銀を流した八幡残渣プールの跡地を見渡すことができました。水俣病は企業（チッソ）が産業廃棄物である水銀を不知火海に流し、その水銀に汚染された魚介類を食べた人や動物たちが被害に遭いました。

八幡残渣プール跡地の説明

次に、今回の水俣病の発生源となったチッソ株式会社（以後チッソ）の正門を見学しました。チッソは、明治の終わりに水力発電の会社としてスタートし、その電力を利用してカーバイト工場を水俣に作り、やがて化学肥料の生産を始め、化学会社として成長しました。チッソの発展とともに水俣市は人口が増え、熊本県下でも有数の工業都市となり、元工場長が市長を努めるなど、地域に対するチッソの影響力や住民のチッソへの依存度も大きくなりまし

水俣駅から見たチッソ正門

た。そのことを象徴するように水俣駅の正面にチッソの正門があります。この場所で被害者たちがデモや座り込みをおこないました。

次に、百間排水口を見学しました。この場所は水俣病の「爆心地」と呼ばれ、この排気口から有機水銀を長期間に渡って流し続けられました。

百間排水口

続いて、水銀ヘドロ埋立地を見学しました。現在では「エコパーク」と呼ばれ、58ha の広大な埋立地となっています。きれいな公園として整備されていますが、公園の下には 100 トン～200 トンほどの水銀が埋められていると言われています。海際には水俣病の慰霊碑が海を臨むように建立されお地蔵さんが無数に置かれていました。

水俣病の慰霊碑

次に、茂道を見学しました。茂道は水俣で最も大きかった漁村ですが、現在はほとんど漁業をおこなっておらず、患者たちが拓いたみかん畑が広がっています。港には釣り船が係留されていました。

最後に水俣病歴史考証館を見学しました。考証館の建物は水俣病患者が働く「キノコ工場」として建てられましたが、患者がいつでも寄り集まれる場所としてそこに相思社が作られました。現在はネコの実証実験をした小屋や、水俣湾に堆積した水銀ヘドロの一部など当時実際に使っていたものや被害者から譲り受けたものを展示し、水俣病の歴史が分かりやすく展示されています。被害者の側から公害事件が語られているので、行政の運営する資料館では得られない知見がありました。

生産者の説明を聴く様子

2 日目は水俣市の生産者を訪問しました。初めに「生産者グループきばる」を訪問し、生産者の田上さん、佐藤さんの圃場を見学しました。きばるでは甘夏を中心に不知火（デコポン）など柑橘類を栽培し、生活クラブ生協を中心に出荷しています。水俣病の発生により魚介類は売れなくなり、熊本県が甘夏の栽培を奨励していたことから甘夏生産者へ生業を変える人が増え、甘夏の生産者団体が発足しました。「被害者が加害者にならない」をスローガンにできるだけ農薬を使わずに栽培をおこなっています。近年では温暖化等の影響もあり、病害虫の発生で苦労している話なども聴きました。午後はなのはな生協の生産者である福島さんの圃場を見学しました。何か所にも分かれた広大な圃場を見学し、今年の生育状況や害獣などによる被害状況を聴きました。

以上